

●企画
財ボラ伝統文化振興財団

●製作
株桜映画社

●監修
金沢美術工芸大学教授
柳橋 眞

●協力
輪島市
輪島市漆器研究所
石川県立輪島漆芸技術研修所
輪島漆器商工業協同組合
島口慶一

●規格
16ミリ・カラー・34分

●価格
210,000円(消費税別)



檜様地懸盤一式(ひのみそじかけばんいっしき)



重要無形文化財

輪島塗に生きる

文部省選定 教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞 日本映画ペンクラブ推薦

●監修のことば

柳橋眞

輪島を扱った映画は、過去にたびたびあった。朝市の光景とともに、季節の風物詩として取りあげることが多い。だが、今回の輪島塗の映画は、それらと趣きが違う。それは輪島塗技術保存会が今回、ボラ伝統文化振興財団の援助で作成した懸盤や椀・皿などの一式(計十四点)の工程を詳細に撮影したものであるからだ。これらの作品は輪島塗の技術を後世に伝えるための技術記録として作成された。

日頃、輪島塗の作家や職人が願っていた、最高の作品を作るために、改めて桃山時代の懸盤の名品、「芦辺時絵懸盤」(高台寺伝来、重要文化財)を調査し、木曽檜の良材を求めるなどの努力をばらった。制作も厳格をきわめ、檜の樹脂ぬき、合板の焼炭作業、奈良晒を使った布着せなど、通常は見られぬ作業が多数加わった。

懸盤が塗れたら漆塗りとして最高だといわれてきただけに、塗師の刷毛さばきも入念だ。加飾も菊文様を沈金と時絵が互いに相手を引き立てあっている、一つに調和したものとなった。昭和六十一年から平成元年にかけて四か年をかけた、この輪島塗技術記録は可能性の限界をきわめたものといえよう。もはや国内産檜の良材は手に入りにくいという、材料問題一つ考えただけでも、この高い水準で再び作成されることは難かしいといえよう。

こうした貴重な試みを知った桜映画社では、その過程を詳細に撮影した。内弟子の年明けの儀式など輪島塗の職人の生活まで、きめ細かく撮影され、映像は美しい。特に木地の処理や入念な漆塗りは、漆工専門家にとっても貴重な資料となるだろう。なによりも、この大事業に取りくむ技術者の気迫が、その顔や手の表情にあらわれ、神経をはりつめた作業となり、緊張感にみちた映画となっている。

一人の名匠の記録映画ではなく、蒔絵や沈金、漆塗りや呂色(漆面を研ぐ)、指物・曲物・挽物・朴物(朴材で脚などを作る)などと八職に及び技術者の分業を総合するだけに、構成に苦勞されたが、その努力が映画に厚みを与えたといえよう。専門家はかりでなく、本格的な仕事を持つ、ずしりとした重厚感や気品を味わってもらうためにも、広く鑑賞されることを期待したい。



檜様地黒塗懸盤一式(ひのみそじくろぬりかけばんいっしき)



檜様地沈金蒔絵菊文懸盤一式(ひのみそじちんきんまきえきくもんかけばんいっしき)

●配給

日本紹介映画・ビデオコンクール金賞

【映画に記録された懸盤一式の制作工程】

昭和61年の輪島塗技術保存会の総会で、制作作品には極めて高度の技術が必要とする懸盤一式が選ばれ、保存会員全員の参加で、現代の最高の技術をもって挑戦することに決まった。



① 今回の作品は、千年以上の保存を考えて、素材には木曽の檜が使われることになった。懸盤の命は、盤や足の曲線部分の美しさで決まるといわれる。豆カンナ、ノミ等のさまざまな道具を使いわけながら、曲線の微妙さをとらえていく。



② 同じように、椀も木地作りが終わると、椀木地固めにかかる。椀の曲線にピッタリと密着したヘラで、外側も内側もまんべんなくたっぷりと漆を塗って固めていく。



③ ④ 摩擦の激しいフチや高台の部分に布着せをおこない、黒白漆を使った中塗は、塗り、乾燥、研ぎの工程を微妙な姿、形がととのうまで何度もくりかえしていく。



④ 曲物師によって汁をいれる湯桶の制作——。飯鉢のフタは、いく重にも曲げ輪を重ねて作られており、湯桶のヒシャクの柄も五枚重ねで作られている。ただし、この丁寧な仕事も、木地のときだけしかみることはできない。

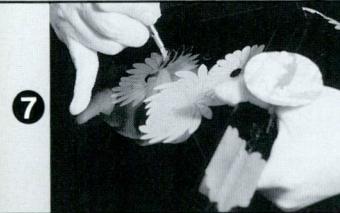


⑤ 懸盤の上塗は、ホコリや風をよせつけないように、特別の上塗部屋を使う。塗り師は、刷毛の手を休めることなく一気に塗っていく。この後、回転風呂で乾燥する。



⑥ 表面を研ぎ炭でなめらかにし、生漆を綿につけて拭いて、漆の肌をしめ固める呂色磨き——。広い鏡板は手のひらで、こまかなところは指先で磨きあげる。これも、風呂での乾燥、研ぎ、磨きと数回くり返されて漆のつやがあがってくる。

こうして、木地作りから百をこえる工程を経て、黒塗の懸盤一式が出来上がった。



⑦ 次は、蒔絵と沈金が一体となった作品の加飾の作業にとりかかった。ベンガラ漆で花ピラをかき、金粉をまき、粉蒔きをおこなう。そして、この上から漆をうすく塗りこみ金粉を定着させる。油砥粉で磨いた後、呂色磨きで磨き上げて沈金の工程に移る。



⑧ 沈金にはいくつかの方法があるが、今回の作品では立体感を表現できる点彫りが選ばれた。すくい上げるようにして点をならべていく。この上から漆を塗りこみ、点の中だけに漆が残るように拭く。そして、真綿に金粉をつけて菊の花を浮かび上がらせる。

このようにして、平成2年、足かけ五年の歳月をかけて、檜椀地懸盤一式、椀椀地黒塗懸盤一式、椀椀地沈金蒔絵文懸盤一式の三点が完成した。

●——解説

日本の代表的な漆器である輪島塗の技術は、昭和52年に重要無形文化財の指定をうけて以来、輪島塗技術保存会の会員たちによって技術の伝承と発展がはかられて、今日に至っている。

輪島塗の技術は、木地作り、塗り、加飾と総合された幅広い技術で、保存会会員はそれら各々の業種で30年以上の経験と技術を持った人々によって構成されている。

昭和61年1月の総会で、20世紀の最後を飾る事業として輪島塗の最高の作品を保存会の全員参加で制作する事を決定した。最も高度な技術を要求される懸盤一式の作品は、事業決定から足かけ五年を経て、平成2年3月に完成した。

漆器の良し悪しは木地作りできまるといわれるが、特に、今回の作品では、永久保存を考えて新しい木地作りの工夫もされている。

映画では、これら作品の制作過程を克明に記録しながら、輪島塗の伝統や組織を描き、その全体像をつかまえて行く。

●——作品制作に参加された人たち

重要無形文化財輪島塗技術保存会員

- | | |
|-------|---------|
| ❖ 椀木地 | ❖ 呂色 |
| 北浜 保 | 大橋良夫 |
| 辻 義男 | 加本康夫 |
| 小崎清人 | ❖ 蒔絵 |
| ❖ 曲物 | 張間麻佐緒 |
| 山下博之 | 坂本正春 |
| ❖ 指物 | 小森克巳 |
| 奥野秀次 | 田崎昭一郎 |
| 高柳修一 | ❖ 沈金 |
| ❖ 朴木地 | 三谷吾一 |
| 田中宗太郎 | 古今菁峰 |
| ❖ 髹漆 | 舟掛道雄 |
| 塩多慶四郎 | 坂谷光治 |
| 宮腰 強 | ❖ 学識経験者 |
| 後藤孝一 | 松本昌平 |
| 徳野宗林 | 五嶋耕太郎 |
| 中浜儀太郎 | 塩安誠治 |

- ❖ 重要無形文化財保持者
大場松魚 故松田権六

●——製作スタッフ

- 製作=村山和雄
演出・撮影=村山和雄+山屋忠司
脚本・構成=大島善助
音楽=長沢勝俊
照明=浅見良二+本橋俊男
編集=中根信也
録音=朝日スタジオ
現像=ソニー・PCL
解説=相川浩

●——製作

株式会社 **桜映画社**

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666